

石灯籠とは何か

* 灯籠とは点灯設備で、石灯籠は火袋を持った点灯設備である。野外に置かれる半永久的な石造物である。形は石灯籠に似ていても、火袋の穴の空いていないものは石灯籠とは言えない。よく似ている石造物で石幢というものがある。

・灯籠は仏教と共に、我が国に伝来したと考えられる。経文、経典の中に燃香華の功德が説かれている。

・石灯籠の伝来

仏教はインドで誕生し、中国に渡り、朝鮮半島から日本に入ってきた。灯籠はインドで油に火を灯して明かりの器具として存在していたが、今のところ石灯籠は発見されてはいない。石の層塔(ストウパ)の古い物があるので、石灯籠の一部が発見されそう。だから今のところインドでは石灯籠は存在しないと見てよい。

仏教はインドから中国に入って、大いに発展して、同時に石灯籠も作られた。山西省大原の龍山童子寺の磨崖仏前に八角型の石灯籠があり、それは唐以前のもと思われる現存する最古の物である。松江省寧安県東京城南大廟にも石灯籠があり、それは昔の渤海時代の物である。インド起源ではあるが、石灯籠は中国で成立した物と考えられる。

朝鮮半島では古い石灯籠が数多く残っている。新羅時代の物で、日本においては、奈良・平安時代に当たる物である。

仏国寺大雄殿前の八角石灯籠 新羅の古都慶州市

華嚴寺石灯籠 新羅時代

海印寺石灯籠 新羅時代 大邱市 平安初期

浮石寺無量寿殿前 新羅中期

など20基を超える古い石灯籠が残っている。

日本では飛鳥寺で石灯籠の基礎の部分が発掘されたが、今は保存のため地中に戻されている。飛鳥時代の物が発見されていることは大いに価値があると言える。

奈良時代のもので残っているのは、三基存在する。

当麻寺の石灯籠

興福寺五重塔前の石灯籠の基礎

興福寺中金堂前の石灯籠の基礎

以上三つである。それ以後各時代に数多くの石灯籠が作られ、現在でも作り続けられている。

*石灯籠の全体を分解すると、上から宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎・基壇から成り立っている。

宝珠には請花がつくものがある。

笠には降り棟・蕨手がつく物が多くある。

火袋は三区に分けられる。上区には連子が刻まれ、中区には必ず火口が空けられている。円、三日月窓が刻まれているものがある。また、仏像や梵字の彫っているものがある。下区には格狭間が掘られている。

中台の側面には格狭間が彫られているものも多く、走り獅子、三茎蓮華、孔雀などが彫られている。下面には蓮華の花弁が彫られ、上面に蓮華の花弁の掘られているものもある。

竿は上節・中節・下節があり、連珠紋の帯のあるものもある。

基礎の上面には反花（そりばな）の花弁が彫られている。側面には格狭間が彫られているものも多く、無地のものもあり、蓮華紋・孔雀紋が彫られたものもある。

*石灯籠の時代別の特徴

・飛鳥・白鳳時代 この時代のものは未だに発見されていないが、明日香村の飛鳥寺で石灯籠の基礎と思われるものが発見された。しかし保存のために、また埋め戻された。

・奈良時代 当麻寺金堂前石灯籠が建っているだけで、あとは稚桜（わかざくら）神社（桜井市）石灯籠の残欠がある。八角灯籠では蕨手はまだ無かった。大陸の風を受けて雄大な感じであった。しかし、この頃から日本化の傾向が見られるようになってくる。

・平安時代 大陸の気風少しは残るが、文化の日本化が進んだ時代である。この時代に神社にも石灯籠が建てられた。凝灰岩製の石灯籠が多かったので現存するのは少なく、春日大社の柚木灯籠・熊本県浄水寺跡の残欠・平等院鳳凰堂前の石灯籠基礎の三つがあるのみである。

・鎌倉時代 初期・中期のものは個性的で創造的で隅々まで力がこもり、生き生きとしている。名品が多く残されている。蕨手の生まれたのもこの時代である。後期だんだんと柔和な感じとなり、洗練さが頂点に達した時代で、同時に型の固定化の傾向が見え始めた。四角型石灯籠が創案されたのはこの時代で神社の献灯されるためにできた。

・南北朝時代 形の固定化の傾向が出て、また形式的となり個性性が薄くなり、装飾性が増していった。

・室町時代 南北時代の特徴がいっそう強くなり、その硬直化がおこり、伸びやかさ、迫力も無くなって行く。石灯籠の創作の中心は京都であるが、全国的に一般化して造られるようになった。

・桃山時代 室町時代の退化を受けて、ますます形式的となって硬直化して、定形化して行き、あまり見るべき物が無くなってしまった。しかし、茶の湯が盛んになり、茶庭の露地の中に取り入れられ、灯り取りとして、また庭の風物として石灯籠は置かれた。水鉢やその他の石造物も数多く使用された。その中で名物灯籠が選定され、社寺の灯籠が庭灯籠となった。また庭灯籠が社寺灯籠として、献灯用として進出した。またこの時代から社寺に二基一対として建てられるようになった。

・江戸時代 桃山時代に茶庭が発達して、この時代になると茶庭と一般の庭が同化して、一般の庭にも石灯籠や他の石造物も庭の点景物として入っていた。桃山時代に硬直化した石灯籠は、江戸時代になって製作が自由になり、新しい型が次々と考案され変形灯籠が生まれた。時代が平和になり一般庶民が社寺に奉納したり、自分の墓所に建てたり、自分の庭に導入したりして今までにない発展を遂げた。しかし、需要に応じ切れず、職人を急に養成する事に追われ、芸術的創作の教養を身につけさせる余裕なく、ただ師匠の伝授のそのままに作り、また、歪めて改悪するだけで、次第に創造の陰がひそめてしまった。名物灯籠を入れる事が流行したが、数に限りがあり、容易に手に入らず、それらを本歌として、模刻する事が流行した。しかし、本当の模刻は難しく、技術.技法の劣った者が模刻するので、始末が悪く、訳のわからない物が多く排出された。変形灯籠も前記の同じ基盤の上で生まれ、奇をてらう物が好まれ、真の創作に優れた物はできにくくなった。また名物灯籠の図版が出版され、全国に広められ、前に述べた事が全国に流布してしまった。

・明治時代 この時代に入って石造物・石灯籠の研究などは、歴史的研究など学問的にも実証的に行われた。天沼俊一、川勝政太郎などの学者が出た。その影響を受けて一部ではあるが、歴史的灯籠を忠実に再現し、また、その気風を受け継いだ石灯籠が作られるようになっていく。現代に入っても良質な模刻灯籠がわずかながら作りだされている。

参考図書

[illegible]

今回見学では以下の物を見たいと思います。

・興福寺

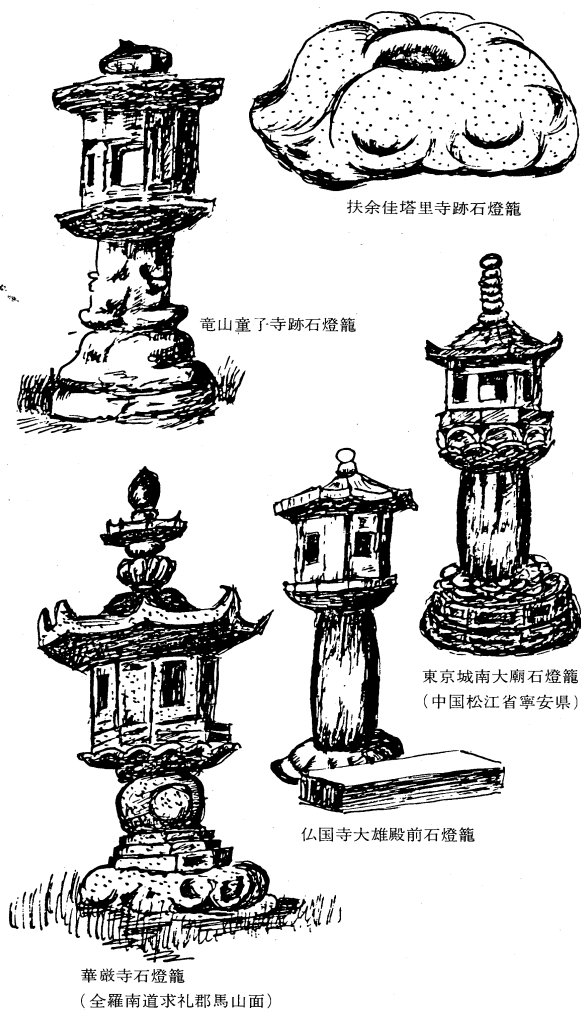
五重塔前灯籠基礎 奈良時代
五重塔前四角型 室町時代
東金堂前灯籠 現代 川勝政太郎

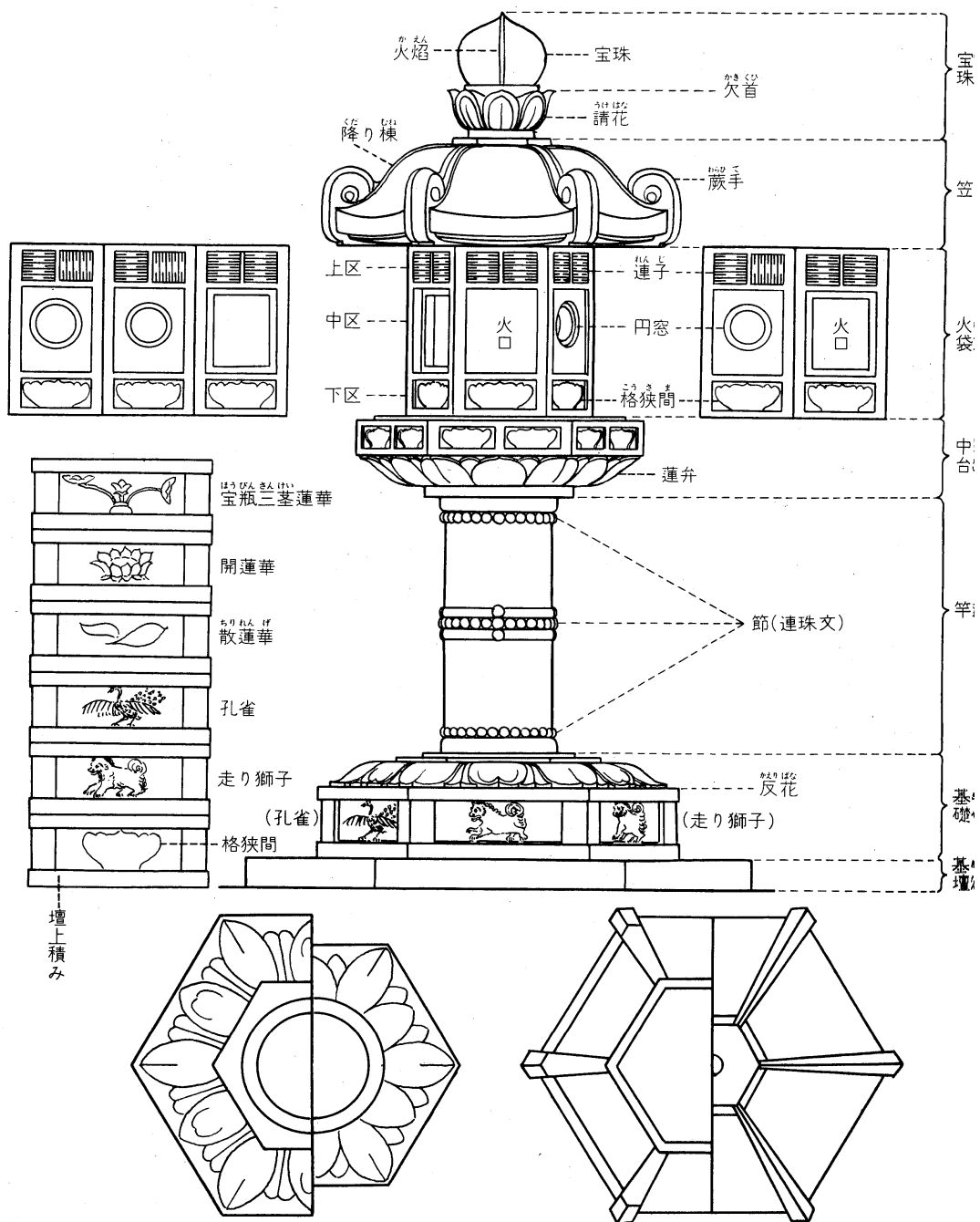
・春日大社

柚木灯籠 平安時代
西の屋型灯籠 元亮三年 鎌倉時代
祓戸型灯籠 室町時代
奥の院型灯籠 江戸時代
雲卜型灯籠 江戸時代

・東大寺

法華堂前（三月堂）灯籠鎌倉時代





石燈籠の各部名称 (図は河桁御河辺神社石燈籠で天沼俊一著『石燈籠』の図をもとに作る)



五重塔前基礎



五重塔前四角灯籠



東金堂前灯籠



柚木灯籠



西の屋灯籠



奥の院



祓井戸



雲卜型



東大寺三月堂前